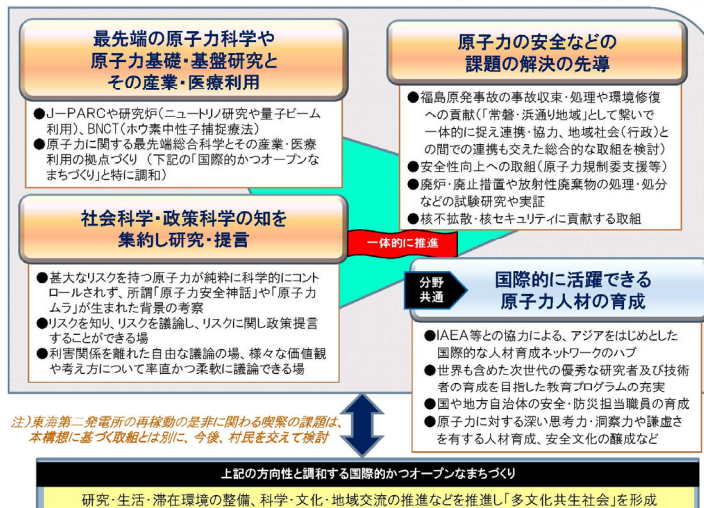


# 地域社会と原子力に関する社会科学研究支援事業 10年を振り返って

- 原子力に関わる社会科学・政策科学の知を集約する研究拠点の一つとなり、その成果をまっちぐりに活かしていくために、研究のネットワーク化と人材育成を図る
- 原子力が抱える科学技術だけでは解決できない(トランス・サイエンス)諸問題を対象とする
- 若い世代の研究者あるいはその卵(大学生・大学院生)を支援対象とする
- 研究成果は広く市民に公開し、自由な議論の場を通じて住民一人一人が原子力の問題を考える機会を設け、地域社会が主体的に原子力や科学技術と関わる社会環境の構築に貢献する

## ■TOKAI原子力サイエスタウンが目指す方向性【優先順位はあく同等】

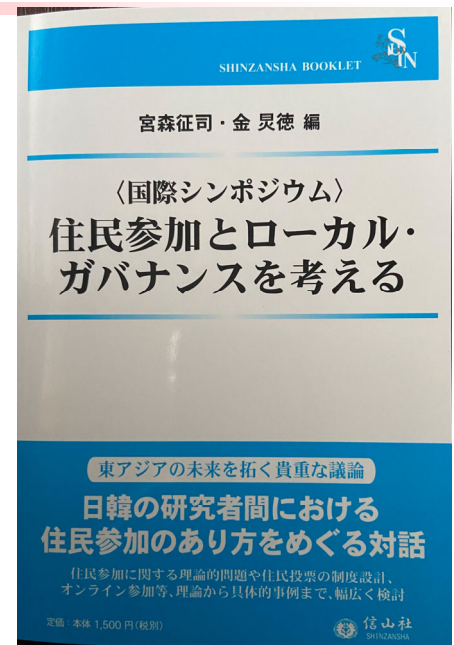
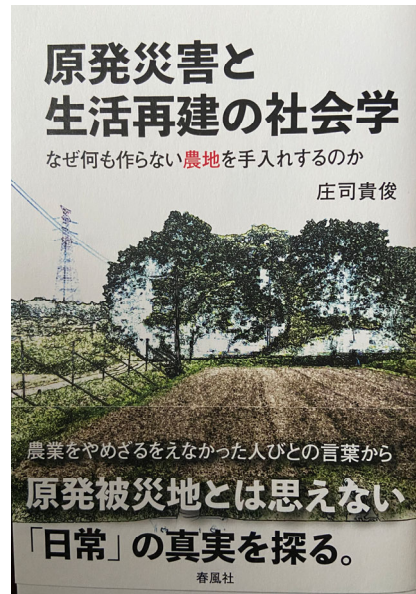
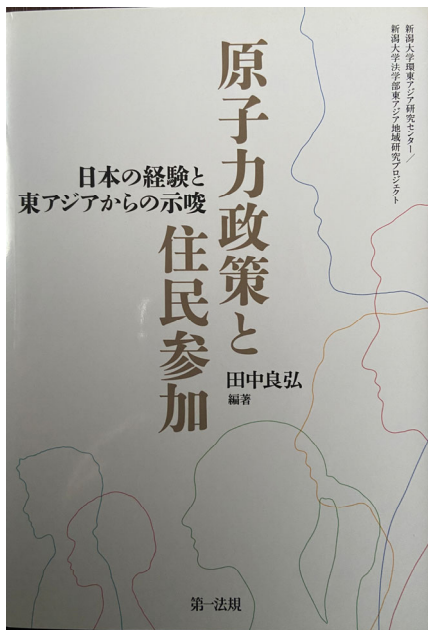


## 選考委員(五十音順)

五十嵐泰正(筑波大学 教授)・・・2022年度より  
小林傳司(大阪大学 教授)・・・2014年度のみ  
鈴木 さちよ(市民)  
滝田 薫(茨城キリスト教大学 教授)・・・2014-2021年度  
谷口 武俊(東京大学 教授)  
永目 裕子(市民)  
松原 克志(常磐大学 教授)  
馬渡剛(茨城大学 教授)・・・2023年度のみ  
萩谷 浩康(東海村 副村長)

1

年度	採択/応募	研究件名(研究者名)
2014	1/2	どのような高レベル放射性廃棄物の“処分”が望ましいのかー東海村における市民の意見の調査と分析ー(渡辺凜・寿楽浩太)
2015	3/4	どのような高レベル放射性廃棄物の”処分”が望ましいのかー市民と専門家の対話と協働の手法開発ー(渡辺凜・寿楽浩太) 東海村内の自主防災活動をより活発化させるためにはどうしたらよいか(梅本通孝・大金誠) 原子力防災力の充実のための役割はどのように分担されるべきか:地方サイドから提案する原子力利用に対するパートナーシップ(東海・茨城モデル)(中川唯)
2016	1/2	「SPEEDI」とは何か、それは原子力防災にどのように活かせるのか?(寿楽浩太・菅原慎悦)
2017	2/2	地域社会における脱原発のソフト・ランディングはどのようにすれば可能か(湯浅陽一) 原子力防災に市民は主体的に関与できるのか:防災学から原子力防災を考える(城下英行・佐藤正彦・高橋淳・家田修)
2018	1/4	原子力分野における住民参加に関する法制度はどうあるべきか(田中良弘・寺迫剛・宮森征司)
2019	2/3	住民参加は原子力に関する住民の意識にどのような影響を与えるか(宮森征司) 原発被災者はどのようにして生活を立て直してゆけるのか(庄司貴俊)
2020	1/6	東海第二発電所の再稼働は関東地方の市町村議会でどう議論されているのか(砂金祐年)
2021	1/3	平和利用と原子力災害の記憶の継承に基づいたコミュニティ形成はいかに可能か?(山本昭宏)
2022	1/1	大型研究開発事業の誘致・実施に際して自治体はどのような役割を果たすべきか?(山谷清秀)
2023	1/3	原子力発電所立地自治体の産業構造はどうなっているのか(三好ゆう)



3

## 一般社団法人 複合リスク学際研究・協働ネットワーク

Transdisciplinary and Open Network for Risk Research and Collaboration

本法人は、複合リスク問題を対象として、①自然科学・工学領域、人文・社会科学領域の研究者交流を通して多様な研究観への理解を深めるとともに、分野横断的に専門知の統合・活用を図る学際研究を活性化する、②研究者が政策意思決定者や市民と対話・協議する場を共創・実施する、ことを目的とする。

法人の略称名TONERICO(トネリコ: 栲)は、日本に自生するよく見られる木の名前で、扉の滑りを良くするために利用されたり、弾力性に優れるため野球のバットに使われます。また一本では役立たないが複数で役立つという教訓にも使われます。花言葉はいくつかあり、その一つに「思慮分別」があります。花は5-6月頃に咲きますが、花が散るとどこにあるのか見分けが付きません。

つまり、リスクはどこにでも存在していて、でも普段は見えない、一つのリスクだけを考えていてはダメで、様々な壁や扉の隔たりを無くし、柔軟に考える、当法人が意識すべきものを象徴すると考え、略称名をTONERICO(トネリコ)としました。

4